

1996-29

文

化

1996年(平成8年)7月6日(土曜日)

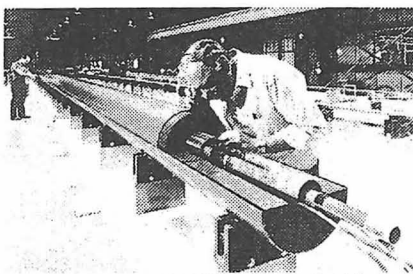
科学と社会をどうつないでいくか。かつてないほどの切実な回答が求められている。この間に、積極的

に取組もうとする研究者の姿が目立ち始めた。これまでの理系「文系と端的に区別されていた縦割りの学問分野を見直す試みだ。

先端技術市民に通訳を

「知」の総合化を求めて

<下>



米国ではSSC装置建設中止が先端科学への市民の関心を高めた

出身。日本の原子力政策や、松本は社会学出身の研究が現代社会とは切っても切り離せないはずの科学の役割を棚上げし、た状態で議論を展開してきた。佐倉は「今後の科学者は先端ばかりに目を向けるのではなく、これまでに得られた知識をいかに再構成し、活用するかという方向の研究も必要だ」と主張する。人工生命研究にはせん

「いた」と文脈した。吉岡は「一般市民が科学技術をきちんと評価するためには、科学技術を俯瞰(ふかん)的に社会に位置付ける科学社会学の方法論は有効」と語る。大学院に専門コース

学問の見取り図必要 先端科学を徹底的に取材し、分かりやすい言葉で語る評論家の立花隆は昨年、東大先端研客員教授に就任、今春からは教養学部で「応用倫理学」の講義を始めた。インターネットのホームページでも公開されている講義内容は、先端科学と哲学を結び付ける、新しい「知」のあり方を示すものだ。

米岡では超電導超大型粒子加速器(SSC)建設が、費用の高額さから論議の的となり、中止されたことがあった。この一件は先端科学技術への市民の関心を高めるという効果をもたらした。科学技術を市民が論議できる土壌作りは日本でも必要」と指摘する。科学社会学者はまさに一般市民と、科学者をつなぐインターフェース役を買って出ようとしている。こうしたインターフェ

鋭敏な問題意識を抱く者たちの間で芽を吹き始めた、科学と社会、人間をつなぐ試みはいずれも学問のタコツボ化を脱し、「知」の総合化を目指すものだといっている。まず求められるのは、正確な見取り図を描き、現状を十分に把握することだろう。(敬称略) 文化部 堤篤史

「科学社会学」など試み芽吹く

でもブームとして盛り上がる機運が出てきた。生命体のもつ自己増殖や進化といった特性をコンピュータ上で合成する人工生命は、生物学者、数学者から哲学者、CG(コンピュータグラフィックス)アーティストまでを巻き込んだ。結果した研究者たちが、未知の発見への期待とともに、細分化された分野

「知」のヒエラルキーの頂点に位置付けられると考えられていた物理学を志した彼が、研究室で得たものは失望だった。「社会を理論的に把握するためのツールとして、物理学をどう生かすかが、研究室からは社会がすっぽり抜け落ちて

ス役を養成するための大学院も生まれた。東京工業大学が今春に設けた社会学工学研究科の「価値システム専攻(VALDES)」は、理系単科の同大学に初めて登場した人文系の研究コースだ。「全分野的な専門教育」を目指すという。

市民に語りかける形で、専門家を媒介する「インターフェイス」を構築する。VALDESが位置付けられている。

「貨幣」と「言語」——価値の起源をめぐって

橋爪大三郎

価値(value)とはなにか?

価値とはすべて、人間にとって有用なもの。人びとがそれについて常に配慮して、手許にとどめておくか、記憶にとどめておくに値するものことである。

とりあえずこのように言えるとしても、ここでは、動物や植物の場合と大差なくなってしまう。たとえばライオンやシマウマも、水や獲物や牧草や仲間の動物を必要とするはずだ。それは、彼らにとっての「価値」ということになる。人間だけが理解する価値とはなにか?

人間にとっての価値は、単に自分と対象とのあいだに成り立つ関係ではなくて、他者を媒介にした関係でもあるという特徴がある。たとえば、一万円札があるとすると、あなたはその価値を知っているだろう。なぜ一万円札に価値があるのか、いくらそのものをながめても、理由はわからない。ほかの人びとが、一万円札を大事にする。他人の集まりである社会全体で一万円札が大事だということになっているから、あなたも一万円札が大事だと思わないわけにはいなくなっているのだ。

このように考えるならば、価値は、立派な社会現象であると言える。以下、価値という現象の成り立ちとそれを支える人びとのふるまいについて、考察してみよう。

一 価値とコミュニケーション

社会のなかで価値をそなえたものは、さまざまある。

まず、貨幣(money)。貨幣は、市場で流通し、それと交換に商品を手に入れることができる。商品はいろいろ役に立つから、その所有者にとって価値である。価値のある商品と交換できるのだから、貨幣も価値である。

もうひとつ、言語(language)もそうである。言語が担うのは、価値よりもまず意味であろうが、すぐあとでのべるように、意味もまた価値の一種とみることができる。

貨幣と言語、この二つを価値の典型的な形態と考えよう。そして、両者の共通性を取り出してみよう。

*

価値は、それが流通するコミュニケーションの回路を前提にしている。たとえば、貨幣(や商品)は、それが流通する市場(コミュニケーションの回路)を前提にしている。また言語は、それを理解する人びとのおりなす言語共同体(コミュニケーションの回路)を前提にしている。価値が存在するとは、それが流通するコミュニケーションの回路が存在するということなのだ。価値とは、コミュニケーションの回路(ひとつの場)のなかで、あるものが帯びる性質にはかならない。

コミュニケーションの回路は、大勢の人びとの共同作業として成立している。他者の協力がなければ、価値はそもそも価値たりえない。貨幣も、また言語も、そうした性質をそなえている。

*

コミュニケーションの回路は、円環(circle)をなしているという特徴がある。

このことは、貨幣を考えてみるとわかりやすい。

貨幣の主たる役割は、ものを買うことができること(購買の手段)である。ものを買うとは、貨幣を相手に手渡して、交換に、相手の所有物を受け取ることだ。日常当たり前のように、こうしたことが行なわれているが、それはそんなに自明なことではない。

ものを買うことができるためには、もの売ってくれる誰か(たとえばA)がいなければならない。売るとは、貨幣を受け取ることである。貨幣は一般に、そのものとしては何の役にも立たないもの(たとえば、ただの紙切れ)なのに、人びとはよろこんでそれを受け取る。すなわち、貨幣には、一般的な受領可能性がある。売り手(A)が貨幣を受け取るのは、売り手が、ほかの誰も(たとえば、別の売り手B)がよろこんで貨幣を受け取ること(貨幣が一般的な受領可能性をもっていること)を知っているからである。売り手Bは、Aの欲する商品を、貨幣と引き換えに売ってくれる。この売り手Bについても、Aと同様のことが言え、また別の売り手Cが貨幣を受け取ると想定しているから、貨幣を受け取るのである。……以下同様。

このようにして、自分—A—B—C—……と続く、交換の連鎖が成立する。この連鎖はどこまで続くのだろうか。それが仮に、どこかで途切れる(端点がある)としてみよう。すると、最後の売り手(最後の貨幣の受け取り手)Zが存在する。Zは、貨幣を受け取ってみても、なんの役にも立たない。貨幣は、Zの手の中

で、ババ抜きのようなものになり、もはや誰もそれを受け取ろうとしない。Zには貨幣を保有する動機がない。そこでZは受け取りを拒否する。すると、Zの一人まえのYも、貨幣を保有する動機を失う。そこで貨幣の受け取りを拒否する。……以下同様に、CもBもAも貨幣を受け取らず、一切の貨幣を仲立ちとした交換は成立しなくなってしまう。ちょうど編み上げた編み物の最後の糸をひっぱると順ぐりに全部がほどけてしまうのと同じだ。この対偶をとるなら、「およそ貨幣による交換が成立するためには、交換の連鎖に端点(終点)があつてはならない」のである。

以上を整理してみよう。貨幣は、交換の連鎖のなかで価値をもつ。その連鎖は、端点のない円環(コミュニケーションの回路)になっている。貨幣の一般的な受領可能性は、受領可能性が受領可能性によって支えられているという自己言及によってできあがっているから、端点は存在できないのである。

このことは、貨幣の起源を論じることはできない、という結論を導く。実は、そう結論してしまうのは性急すぎるが、少なくとも、貨幣が貨幣になり始めるところや、貨幣が貨幣でなくなるところを、論理整合的に描くのは無理だと考えたほうがいい。

*

では、言語はどうだろうか。

言葉の意味は、その言葉がこれまでずっとどのような使われてきたかという、慣習に根を下ろしている。言葉は、いつとも知れない昔から語りつがれてきた。したがって、言葉をやりとりするコミュニケーションの回路にも、端点を見つけることはできない。

言語は、言語の外の实在——現実の世界——と関係し、そこから意味を獲得するように思われがちである。

しかし、ある言葉の意味を支えるのは、さしあたり、それ以外の言葉である。ある言葉の意味は、別の言葉に置き換えることができる(それが言葉の意味である)。それらは互いに支えあって、人びとのあいだを流通する言語のシステムを構成している。言い方を換えれば、言語の外に言語と独立したリアリティを考えると、とができるというのは、言語の与えがちな錯覚なのだ。貨幣が端点を持たないでどこまでも市場を流通していくように、言葉はどこまでも言語のシステムのなかをたどるのである。

言語が現実の世界と関係し、そこから意味を獲得すると考えるならば、言葉が生まれ出る場所、言葉が意味を紡ぎ出す場所、あるいは言葉が純然たる意味に還元されていく場所(要するに、言葉の端点)が実在しななければならなくなる。これは、真性の(絶対の)独我論を帰結する。初期のヴィトゲンシュタイン(L. Wittgenstein)が独我論に陥ったのは、言語の意味を世界との対応関係によって基礎づけようとしたこと、論理必然的な帰結だった(橋爪、一九八五)。彼は後になって、この立場を自ら否定し、「私的言語は不可能である」と主張した。言語の連鎖に端点があるとは、言葉の意味に特権的な責任を有する誰か(ある身体)が存在する、ということなのである。

独我論(他者など存在しない)という主張は、論駁するのがむずかしそうに見える。われわれは、他者が存在することの間接的な証拠を知っているだけである。いっぽう、自分が存在することについてなら、デカルトのべたように、直接的な証拠がある。自分の存在√他者の存在。独我論はむしろ、素直な結論なのだ。しかし私は、独我論を論駁するのはたやすいと思う。私に独我論の正しさを論じる相手は、そのふるまい(私を説得しようとしていること)によって、私の存在を認めているのだ。本当に恐るべき独我論があるとするれば、それは、私を含む一切の他者の存在を認めず、ひたすら黙して何ごとも語ろうとしない場合(意味に

満たされた沈黙)であろう。ただしこれは、言語によって表現できないのである。

真性の独我論は、一切の他者を否定する。そのことによって、そもそも言葉が慣習によって支えられた意味をもっているという事実を否定する。この結果、言語はまったく私的なものになる。この対偶をとるなら、*“およそ言語によるコミュニケーションが成立するためには、私的言語が成立してはならない”*のである。

二 貨幣の起源／言語の起源

このように貨幣も言語も、それ以外の価値も、コミュニケーションの回路のなかで(のみ)実在している。ということは、そこに端点を見つけ出すことができない(起源を語ることはできない)ということである。

にもかかわらず、貨幣や言語や、そのほかの価値の起源を語る言説はめずらしくない。このことを、どう考えたらいいのか。価値の起源は、正当に語りうるものだろうか。

*

まず、貨幣の起源を語る言説について、考えてみよう。貨幣(経済的価値)の起源は語りうるのか。

貨幣の起源を語る言説の代表的なものは、マルクスの『資本論』(特にその第一章、商品論)である。マルクス主義はこれを基礎に、価値の起源をめぐるさまざまな言説を紡ぎ出してきた。

マルクスは貨幣を、疎外・物象化の帰結として描き出す。マルクスには独自の自然哲学(人間が本来こうだったという理想の原像)がある。人間はもともと、自然と交流し、また人間同士が交流する、あるべき姿(彼の言葉では、類的存在ないし類的本質(Gattungswesen)をそなえていた。この原点から、マルクスは価

値の起源を語る。こうした自然経済において、分業と私的所有が始まり、階級が生まれる。人間は自分の活動(労働)の成果から疎外され、相互にも疎外される。その結果、商品や貨幣が自分たちによそよしいものとしてたち現れる。それ自身が、価値あるものとして物象視されるようになる。本来価値のあるのは労働(人間みずからの活動)だけのはずなのに、価値のなかったものが価値を帯びはじめる。——貨幣は、こうした価値の起源を隠していると説明される。

こうした言説は、“隷属の物語”である。人間が、本源的な価値の世界からひきはなされ、疎外され物象化された世界に連れ去られていく。そしてそれは、もうひとつの“脱出(解放)の物語”とペアになっている。人間が今度は、疎外を脱し、あるべき人間社会の状態(共産主義社会)に復帰していくのである。

*

マルクス主義は、強力に人びとをとらえる言説であった。人びとはなぜ、論理的に語る事ができないはずの、起源の神話にそれほどまで惹きつけられたのか。

マルクス主義が人びとをとらえた背景には、歴史があった。

歴史は、真に生成する何ものかである。あと戻りの効かないかたちで、何ものかが消え去り、何ものかが生まれてくる。貨幣を交換手段とする市場経済が、人類の誕生とともにあったろうか。歴史のある段階で、市場経済が生まれ、貨幣が生まれた。とすれば、貨幣が起源を持つことは否定できない事実である。マルクス主義は、それを語らずにすませるわけにはいかないのである。

この点、言語の起源とは大いに異なっている。

言語の起源を語るのには、容易ならざることだ。なぜなら、言語を営むのが人間の定義だとも言え、言語が

まだ存在していない状態の人間を考えるのはむずかしいからである。マルクスの自然哲学は、本来の人間を、自然との、そして人間相互のコミュニケーションのなかに生きる存在として描いた。彼らは当然、言語を交わしている。ということは、言語は超歴史的存在として、人間社会とともにあり続けるということである。

言語の起源を語る言説は、貨幣の起源を語る言説と、同じスタイルでは構成できない。

*

それが疎外のプロセスであるかどうかは別として、歴史はわれわれを、ある場所から別の場所(新しいコミュニケーション)のシステムに連れ出す。このコミュニケーションのシステムを、その内側から語る場合には、端点のない(起源のない)ものとして語るしかない。したがって、それを生成したものの(起源をもつもの)として語るには、その外側から、語ることになる。語られるもの(新しいもの)は派生的であるのに対し、語る側(その外側)はもとからあったものである。すなわち、

新しいコミュニケーションのシステムの生成は、古いコミュニケーションのシステムを土台にして語るだけである。(1)

コミュニケーションの連鎖は、端点(あからさまな起源)を持たない。そこでそれは、最初にあったコミュニケーションの連鎖(端点なし)から、新しい連鎖(端点なし)への「移行」というかたちをとる。もともとのコミュニケーションは安定していたはずであるから、この移行は、外力が作用した結果として説明される。マルクス主義は、それを、生産力の発展と名づけている。

(1)をもう少し変形すると、つぎの結論がえられる。

最初にあったコミュニケーションのシステムそのものを、コミュニケーションのシステムでないものから生成したものととして、語ることはできない。(2)

なぜ「語ることができない」かと言うと、最初にあったコミュニケーションのシステムには、それを外側から語る場所がないからである。あえてそれを語ろうとすると、ドグマかアナロジーになるほかはない。すなわち、①コミュニケーションのシステムとは無関係に、それ自体が価値であるような何かある実体(たとえば、神)があり、そこからコミュニケーションのシステムが出現したということにするか、さもなければ、②新しいコミュニケーションのシステムの生成を、古いコミュニケーションのシステムにあてはめ、その生成を類推することになる。

後者の例として、フランスの哲学雑誌『テル・ケル』に拠った、テル・ケル・グループをあげることができよう。マルクス主義の立場から言語の成り立ちを説明しようとした彼らは、言語・記号の価値を貨幣の場合となぞらえた。これは、派生的なものが生成するロジックを、もともとのものに適用するという転倒した試みだ。似たような転倒は、『家族・私有財産・国家の起源』や「サルが人間になるにあたっての労働の役割」を著して自然弁証法を展開した、エンゲルスにもみられる。

*

貨幣によるコミュニケーションも、言語によるコミュニケーションも、システムとして完結し、安定して

いる。完結したシステムが、もうひとつの完結したシステムに移行していく必然を、形式論理によってのべることができない。このため、弁証法(Dialektik)が必要となった。ヘーゲルは、キリスト教神学の論理を洗練し、世界を生成してゆくプロセスとして記述するスタイルに弁証法を完成させていた。マルクスは、弁証法をヘーゲルから受け継いだ。資本主義経済を解体し再構築するためには、貨幣の生成を記述する文体が不可欠である。弁証法と疎外・物象化論と起源の神話。これらは一体のものとして、マルクスが必要とする隷属と解放の物語を提供することになった。

三 起源をめぐる文体

そもそも価値の起源が、なぜ意識されるようになったのか。

起源を意識し強調する文体が、一九世紀から二〇世紀にかけて広く流布した。マルクス主義は言うまでもない。進化論も、進歩の思想もそうである。発展する科学技術にさええられ年ごとに拡大していく経済社会の実態を、そうした思想はとらえようとしたのだ。ここでは、過去から未来に向かって直線的な時間が流れるとされ、未来には現在よりもよりよい世界が広がるとイメージされる。産業社会の時間感覚である。

それではひるがえって、過去になにかがあるのか。過去には未熟な前段階がある。時間の始まる起点には、すべての出発点となる起源の形態がある、とされる。起源が明らかになれば、その後の展開が明らかにできる、と信じられる。歴史学、考古学、人類学がこうした時間感覚を補強した。

初期の社会学も、こうした時間感覚の圏内にあった。スペンサーの社会進化論や、テンニースの業績。デ

ユルケムの『宗教生活の原初形態』。その影響は、パーソンズの『社会類型——進化と比較』にも及んでいる。

*

ところで、システム論と起源論とは、背反する。

システム論は、多数の要因の同時決定モデル。現在の社会状態を、いま現に作動しつつある因果連関によって説明する。それに対して起源論は、現在の社会状態を、過去の要因にさかのぼって説明する。システム論が未発達なあいだ、起源論には存在理由があった。システム論のロジックが明晰になるにつれ、起源論は駆逐されざるをえない。

マルクスの『資本論』は、資本主義経済を、システム論のロジック(線型連立方程式による産業連関分析)により解明した。そこには、「資本の有機的構成の高度化」「剰余価値率(ならびに搾取率)の傾向的低下の法則」などといった動学的な命題も埋め込まれていて、資本主義社会が内蔵する自己矛盾によって解体するという予言を導く仕組みになっていた。マルクス主義は、このシステム論の果実を、弁証法の文体で包みこみ、人類史を貫く法則性(史的唯物論)の一環として位置づけた。科学的社会主義の名のもとに、起源論の枠組みは残されたのである。

マルクス主義のみならず、フロイトの精神分析などにも、起源論に通じる時間感覚がひそんでいる。

こうした時間感覚と絶縁した、システム論のロジックだけから組み立てられた議論として、構造主義(structuralism)が登場した。その出発点である、ソシュールの「一般言語学」は、言語の意味(価値)を、互いに対立しあう差異のシステムとしてモデル化するもの。(これは、言い方を換えれば、言語をその起源

によって明らかにするというアプローチの失効を宣言するものであった。(それをヒントにしたフランスの人類学者レヴィ・ストロースは、「未開」とされてきた人びとの社会形態や神話世界に、現代社会の場合と同型の「構造」を発見。起源の神話に致命的な打撃を与えた。構造主義は、現代思想をマルクス主義の呪縛から自由にし、弁証法と疎外・物象化論の文体から解放させた。

*

それでは、構造主義以後、歴史や時間はどうのように議論されるか。

フリーコーは、その洗練された例のひとつである。そこでは、歴史は、考古学的な記述の対象となる。対象となる過去の社会は、①システム、すなわち、各要素の緊密な秩序として考察される。②時間は純然たるパラメータのように扱われ、③各時点のシステムの状態が薄片のように重ねられて、歴史の動態が記述される。こうした考察は、弁証法と疎外・物象化論と起源の神話から絶縁されたかたちで進められる。

ルーマンもまた、パーソンズののち発展をとげた現代システム論の成果を援用する。彼は、パーソンズの構造―機能分析に絡みついていて、起源の神話と目的論(機能要件の議論)から自由になろうとした。そして、システムの自己生成を、現代システム論から導きうる科学的な言明の範囲で論じようと工夫している。

わが国における社会学の展開も、こうした動きと連動している。

こうした言説の布置をいち早く概観したのが、内田隆三の「〈構造主義〉以後の社会学的課題」(一九八〇)であろう。そこでは、戦後思想の引力圏を脱した新しい社会学的言説の地平が構想された。それに続くように、さまざまな系譜の言説が登場した。

吉田民人の情報資源処理パラダイムは、言語と社会の機能をシステム論のフレームに従って整理する試み

だが、同時に、色濃い起源の神話にいろいろられている。進化の時間軸にこだわる点では、彼が対抗するマルクス主義と共通している。

晩年社会学に並々ならぬ関心をよせた廣松渉も、言語と社会システムを考察したが、終生彼のベースとなつたのは疎外・物象化図式であった。見田宗介も廣松と同じく、マルクス主義の残響のなかで仕事をした。彼の『人間解放の理論のために』や『現代社会の存立構造』は、疎外・物象化論の用語系で書かれている。最近の筆者では、大澤真幸の『身体と比較社会学』が、物象化(第三者の審級)論と起源へのこだわりという点で、この系譜に属するとも言えよう。

これに比較すると、小室直樹や落合仁司や宮台真司といった社会学者たちの仕事には、疎外・物象化論の要素も起源へのこだわりも希薄である。これら三者に共通するのは、システム論への強固な信頼であって、それが起源論と距離を保たせる結果になっている。

*

それでは、価値の起源を論ずることは、社会学にとって不可欠のことなのだろうか。

貨幣も言語も、そのほかの価値形態も、コミュニケーションのシステムのなかにあってはじめて、その機能を果たす。そのシステムのロジックを説明することが、まずなすべきことである。

つぎに、それらシステム相互の関係を考慮すべきだろう。貨幣がそのなかで流通するシステム(市場システム)は、人類社会にとって、派生的な(歴史的な)システムである。いっぽう、言語がそのなかで通用するシステムは、普遍的なシステムである。派生的なシステムを普遍的なシステムと関連づけ、後者によって根拠づけることは、社会システムの全体像を把握するために、意義のある作業であろう。

これは、価値の起源論とよく似ている。しかし大事なのは、価値が価値であるメカニズムはシステムの内
部で(自己循環的に)説明することができるだけである、ということである。価値が、起源論によって、シ
ステムのロジックを飛び越えて基礎づけられることはない。もうひとつつけ加えるならば、社会の普遍的なシ
ステム、たとえば言語のシステムは、それ以外のいっそう基本的なシステムによって基礎づけられることは、
ありえないのである。

マルクス主義は、貨幣の起源論をもっていたが、言語の起源論はもたなかった。それは賢明なことだった。
言語は、マルクス主義のなかで、上部構造とも下部構造ともつかない中途半端な位置を与えられた。言語は、
人間社会に共通する価値の一般的な形式を与えるものである。言語の成立と社会の成立とは、同じ深さの根
拠をもっている。それは、それ以上遡って説明する必要のない、社会理論の出発点になる。(このことについ
ては、本講座5巻『知の社会学／言語の社会学』のなかの「言語派社会学」橋爪、一九九六、を参照されたい。)

それにもかかわらず、社会の成立(価値一般の成立)を、起源論によって説明しようとするかどうか。
それは、価値を流通させているシステムに含まれるのと同じ量の情報を、システムの外側に実体として(た
とえば、十分に社会性のそなわった身体として)想定する、ということになる。それは、社会システムの実
質がその要素である個々人に投影されただけで、社会の起源でも、価値の生成でもない。一種のトートロジ
ーにすぎない。もしも出発点である実体に、あらかじめ与えておく情報量を減らすとすれば、こんどは、価
値の生成を導けなくなる。せいぜいそれを、アナロジーとしてたどることができるだけだ。いずれにせよ、
このような意味で、価値の起源は語りえず、また、語る必要もないのである。

〔参考文献〕

- 橋爪大三郎、一九八五『言語ゲームと社会理論』勁草書房
橋爪大三郎、一九九六「言語派社会学」『知の社会学／言語の社会学』(岩波講座現代社会学5) 岩波書店
内田 隆三、一九八〇「構造主義」以後の社会学的課題『思想』六七六

* "Money and Language: On the Myth of Origin" by Daisaburo HASHIZUME, Sept. 1996

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

1996. 2. 10発行 pp. 177 朝日新聞 おまけ

性愛のかたち・
家族のかたち2



橋爪大三郎
『性愛論』

岩波書店・1995年

性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」(=性愛領域が他の社会領域から隔てられていること)を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデ

オロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人たち」におすすめの一冊。